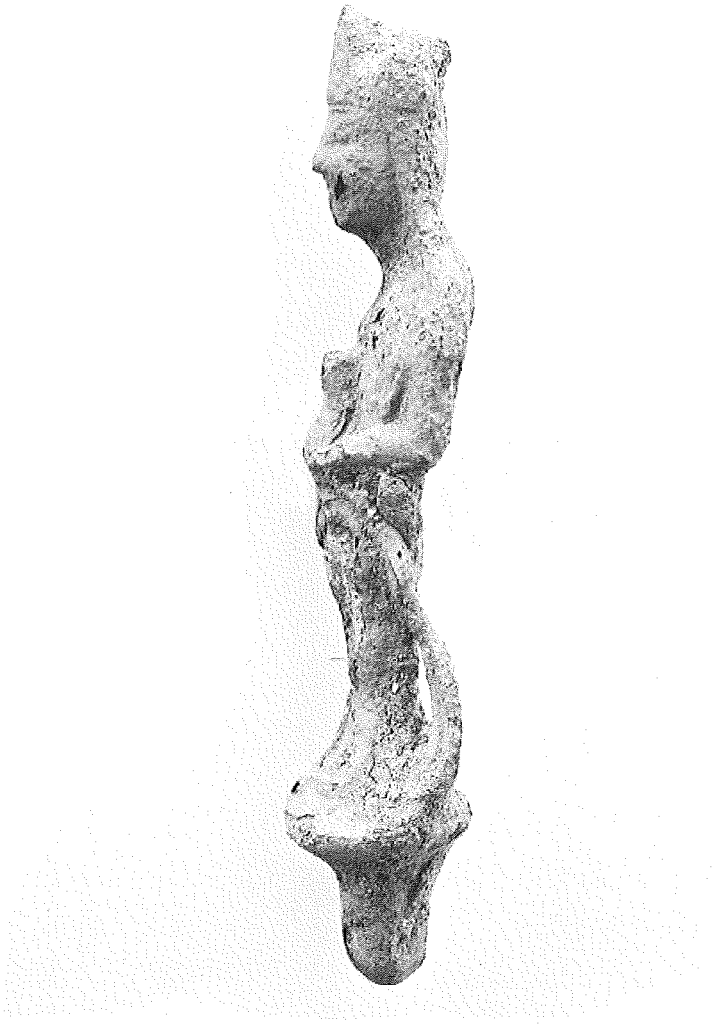
鞠智城（きくちじょう）東京シンポジウム

古代山城鞠智城を考えるⅡ

東アジアの中の古代鞠智城



日時：平成22年8月8日（日）　13：00～17：00

場所：砂防会館別館　1階大会議室　東京都千代田区平河町2-7-5

主催：熊本県・熊本県教育委員会

後援：文化庁・九州国立博物館

目　次

主催者あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・蒲島　郁夫　1

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・古閑　三博　2

シンポジウム日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

講演者・発表者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

基調講演

「日本古代史と鞠智城」・・・・・・・・・・・笹山　晴生　7

「東アジア国際関係の中の白村江の戦い」・・五百籏頭真　１１

報告　「鞠智城の調査成果」・・・・・・・・・・・・矢野　裕介　１３

発表　「朝鮮半島から見た鞠智城」・・・・・・・・西谷　　正　１７

「７世紀日本の国家形成と東アジア

～鞠智城造営の背景～」・・・鈴木　靖民　２５

「古代鞠智城と東アジア」・・・・・・・・・・佐藤　　信　２９

パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１

参考資料

鞠智城関連マップほか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３

主催者あいさつ

鞠智城東京シンポジウム「東アジアの中の古代鞠智城」に多数の皆様に御参加いただき、心からお礼申し上げます。

また、シンポジウム開催への後援をいただいた文化庁及び九州国立博物館には御理解と御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

熊本県では、県内の優れた文化や歴史の価値を再認識し、鞠智城をはじめとする貴重な文化的資産を地域の宝として磨き上げ、活かしていく「品格あるくまもと」づくりに向けた様々な取組みを進めているところです。

鞠智城跡のある菊池川流域は、古来より豊かな恵みに育まれ、全国一の数を誇る装飾古墳をはじめ、朝鮮半島との文化的交流を通して優れた古代文化が花開いた地域です。七世紀後半激動する東アジア情勢の中で、律令国家の建設を目指した大和朝廷によって、古代山城「鞠智城」が築かれました。「六国史」に記載された古代山城の一つである鞠智城は、全国有数の重要遺跡として高く評価され、平成23年度版の小学校社会科教科書に「東アジアと日本のつながり」の項目の中で、「九州の山城と朝鮮半島の情勢」として紹介されています。このことは、これまでの発掘調査により、東アジアとの関連を示す貴重な遺構や遺物が数多く発見されるなど、確実に成果が積み重ねられてきた結果であると考えております。特に、百済系菩薩立像の発見は、百済の高級官僚が日本の古代山城の築城にかかわったとする、「日本書紀」の記述を裏付ける重要な発見として、日本国内だけでなく、韓国においても大きな注目を集めたところです。

この「鞠智城」を、地域の宝として、さらには日本の宝として、しっかりと護り伝え活かしていくことは、私ども今を生きる者にとって、極めて重要な責務であると考えます。そのため、今年度、奈良市で開催中の「平城遷都1300年祭」や韓国忠清南道で開催される「世界大百済典」にPRブースを出展したり、各種講演会を開催するなど様々な取組みを進めています。鞠智城の歴史的意義や学術的価値を、全国に向けて広くＰＲし、その知名度を更に高めていきたいと考えています。

本日のシンポジウムは、そうした取組みの一環として開催するものです。当時の東アジア情勢の中で古代山城鞠智城が果たした役割などについて、各分野の研究における第一人者である先生方から、歴史的意義と今後の課題について貴重なお話をお聞きできるものと期待しています。今回のシンポジウムを通して、鞠智城に関する理解と研究が更に進み、その歴史的・文化的価値が全国的に広く認知されることで、特別史跡指定に向けた大きな契機となることを強く期待しているところです。

来年春には、いよいよ九州新幹線の全線開業を迎えます。この新幹線を利用して、全国各地から多くの子どもたちが古代史学習の場として鞠智城を訪れてもらえるよう、知名度の向上や修学旅行誘致などの取組みを進めて参りたいと思っています。

最後に、本日御参加の皆様の御健勝、御活躍をお祈りいたしまして、あいさつといたします。

平成22年８月８日

熊本県知事　蒲　島　郁　夫

ごあいさつ

本日は、多くの皆様に御来場いただき、心からお礼申し上げます。

今回のシンポジウムでは、「東アジアの中の古代鞠智城」をテーマに開催されます。7世紀の東アジア情勢は、中国に広大な帝国「唐」が出現したことで、百済、新羅、高句麗の三国が拮抗していた朝鮮半島も、百済が滅亡の危機を迎え極度の緊張状態が生じました。このような中で大和朝廷は白村江での敗戦を契機に、鞠智城をはじめとする古代山城群の築城を急ピッチで進め、国家防衛網の強化を急ぎながら、強大な中央集権国家体制の建設を目指し、律令体制の整備を進めました。六国史に記載のある鞠智城は、他の古代山城と異なり９世紀後半まで城名が記されます。このような激動の東アジア情勢の中で、鞠智城はどのような役割を担って築かれ、時間の流れとともにどのように姿を変えながら、そして終焉を迎えたのでしょうか。このことは、大変興味深い課題であり、本日、御講演並びに御発表いただく諸先生方から御意見をいただきながら、鞠智城の歴史的価値付けを確かなものにすることができるものと期待しております。

一昨年の10月23日に鞠智城跡で出土いたしました「百済系菩薩立像」は、朝鮮式山城の築城に百済の高級官僚が直接かかわったとする『日本書紀』の記述を裏付ける発見として、日本国内はもとより、韓国においても大きく注目を集めたところです。

この鞠智城跡のある菊池川流域は、全国で最も装飾古墳が集中する地域です。また、河口まで14kmという下流域左岸、和水町（旧菊水町）の清原台地には、歴史・考古学に関心のある皆様熟知の江田船山古墳があります。銀象嵌銘の太刀はもとよりのこと、出土品は点数ではなく件数で登録されており、92件すべてが国宝です。金製・金銅製の装身具、冠帽、冠、沓、帯、金の耳飾は百済製と云われており、金銅製沓、金製耳飾は、日本に佛教がもたらされる以前の百済25代武寧王陵出土の副葬品と類似していると云われていますし、中でも興味深いことは、その木棺に日本特産の高野槙が使われていたことです。このように、菊池川流域が、古来より、朝鮮半島との人の往来や文化の交流が盛んに行われ、優れた古代文化が花開いた地域であるといえます。

来年３月には、いよいよ九州新幹線が全線開業をいたします。近年、文化財保護の考え方については、それまで「保存」に偏りがちであったものから「活用」に力点が置かれ始めました。地域で活用し、地域を元気付かせる、まさに地域振興の核として文化財を活かすという観点であります。熊本県文化財保護協会としましても、価値あるものを価値あるものとして保護し、そして活用していくといった観点を踏まえ、鞠智城跡の特別史跡指定の早期実現に向けて、また、本県の文化財保護行政の発展に貢献して参りたいと思います。

最後に、本日御参加の皆様の御健勝、御多幸をお祈りいたしまして、ごあいさつといたします。

平成22年8月8日

熊本県文化財保護協会　会長　古　閑　三　博

鞠智城東京シンポジウム　古代山城鞠智城を考えるⅡ

東アジアの中の古代鞠智城

日時：平成22年8月8日（日）　　13:00～17:00
場所：砂防会館別館　１階大会議室　東京都千代田区平河町2-7-5
主催：熊本県・熊本県教育委員会
後援：文化庁・九州国立博物館

シンポジウム日程

12:00　**開　場**
13:00　**開　会**
あいさつ　　蒲島　郁夫

来賓紹介
13:10　**基調講演**
「日本古代史と鞠智城」　　笹山　晴生
「東アジア国際関係の中の白村江の戦い」　　五百籏頭真

14:10　**報告**　「鞠智城の調査成果」　　矢野　裕介

発表
「朝鮮半島から見た鞠智城」　　西谷　　正
「７世紀日本の国家形成と東アジア
　　～鞠智城造営の背景～」　　鈴木　靖民
「古代鞠智城と東アジア」　　佐藤　　信

16:00　**パネルディスカッション**

17:00　**閉会**

講演者・報告者・発表者・コーディネーター紹介

《講演者》

笹山　晴生（ささやま　はるお）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修了。
名古屋大学講師、名古屋大学助教授、東京大学教養学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、東京大学文学部教授となる。1993年、定年退官後、学習院大学文学部史学科教授も務める。東京大学名誉教授。専門は、日本古代史。文学博士。
主な著書に、『古代国家と軍隊～皇軍と私兵の系譜～』講談社学術文庫2004（中公新書としては1975）、『日本古代史講義』東京大学出版会1977、『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会1985など、著書・論文多数。

五百籏頭　真（いおきべ　まこと）

防衛大学校長、神戸大学名誉教授。専門は国際政治学、政治外交史。日本学術会議会員。
京都大学大学院法学研究科修了。法学博士。主な著書に「米国の日本占領政策、戦後日本の設計図」、「日米戦争と戦後日本」、「占領期－首相たちの新日本」、「戦後日本外交史」（編著）、「日米関係史」（編著）、「歴史としての現代日本」など、著書・論文多数。
政府関係の委員として、小渕恵三元首相の有識者会議「21世紀日本の構想」懇談会の外交分科会座長、小泉純一郎元首相の私的諮問機関「安全保障と防衛力に関する懇談会」委員、福田康夫元首相の私的懇談会である「外交政策勉強会」の座長、防衛省改革会議の委員などを務める。

《報告者》

矢野　裕介（やの ゆうすけ）

同志社大学文学部卒業。熊本県文化課を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」勤務。鞠智城跡発掘調査に従事。

《発表者》

西谷　正（にしたに　ただし）

京都大学大学院修士課程修了。
奈良国立文化財研究所、福岡県教育委員会を経て、九州大学助教授・教授。平城宮跡・九州縦貫道予定地内遺跡などの発掘調査に従事。また、ソウル大学留学のほか、韓国・中国・ロシア・モンゴル・ベトナム・タイなどの遺跡を調査。
現在、九州歴史資料館館長、伊都国歴史博物館名誉館長、九州大学名誉教授。
『韓半島考古学論叢』すずさわ書店2002、『東アジア考古学事典』東京堂出版2007、『東アジアの巨大古墳』（共著）大和書房2008など、著書・論文多数。

鈴木　靖民（すずき　やすたみ）
國學院大學大学院文学研究科博士課程修了。
國學院大學教授。専門は、日本古代史、東北アジア古代史。研究テーマは、朝鮮・中国・ロシア沿海地方など隣接地域との関係を主とする１～10世紀の日本王権・国家史と、関東ならびに北方・南島の地域史。
『古代対外関係史の研究』吉川弘文館1985、『古代蝦夷の世界と交流』（編著）名著出版1996、『木簡が語る古代史』（編著）吉川弘文館2000など、著書・論文多数。

佐藤　信（さとう まこと）
東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。
奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、1996年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は、日本古代史。文学博士。
主な著書に、『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館1997、『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会1999、『出土史料の古代史』東京大学出版会2002、『古代の地方官衙と社会』山川出版社2007など、著書・論文多数。

《コーディネーター》

大田　幸博（おおた ゆきひろ）
学習院大学法学部卒業（史学部所属）。県立大津産業高校教諭、鞠智城発掘調査主任（1988年～94年）、熊本県教育庁文化課課長補佐、歴史公園鞠智城・温故創生館長を経て、熊本県立装飾古墳館長。長年、鞠智城跡の調査と整備に携わる。

（発表順・敬称略）

基調講演①

「日本古代史と鞠智城」

笹山　晴生　　（東京大学名誉教授）

はじめに

昨年７月の鞠智城東京シンポジウム「古代山城 鞠智城を考える」では、大田幸博・岡田茂弘・佐藤信・濱田耕策四氏の発表とパネルディスカッションとがあり、さまざまな視点から鞠智城に関する諸問題について議論が行なわれ、新しい課題が提起された。本講演では前回のシンポジウムの成果を踏まえ、日本古代史の流れのなかで鞠智城の果たした役割について考えてみることにしたい。

一　鞠智城の建設と7世紀の東アジア

鞠智城は熊本県の北部、菊池市・山鹿市にある古代朝鮮式山城の一つである。その設置の年は明らかでないが、文武天皇２（698）年の条の『続日本紀』に、大宰府に命じて大野・基肄・鞠智3城を修繕させるとの記事が見えることから、おそらく大野城や基肄城が築造されたのとほぼ同じ、7世紀後半の時期の築造であろう。

鞠智城跡の発掘調査は近年熊本県の手で著しく進み、土塁や城門、倉庫・官衙施設などの遺構の分布や全体の構造が明らかにされ、それが大野城や基肄城、対馬の金田城などと共通する朝鮮式の山城であることが明瞭になった。平成16（2004）年には史跡に指定され、建物の復元など、史跡としての整備も進められている。

鞠智城築造の背景には、当時の東アジアのきびしい政治情勢が存在していた。
７世紀、中国では唐の帝国がめざましい発展を示し、周辺の諸国に威圧を加えていた。朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の3国は、それに対応して自国の権力の強化をはかり、相互にきびしく対立した。

斉明6（660）年、新羅は唐と連合して百済を攻め、これを滅ぼした。しかし百済の故地ではその後も鬼室福信などの遺臣が唐軍に抵抗し、倭国に軍事援助を求めてきた。倭国はこれに応じて大軍を朝鮮に送ったが、天智2（663）年8月、唐の水軍と朝鮮の白村江で戦って大敗し、百済の王族・貴族らを伴って帰還した。

白村江の敗戦後、倭国は唐や新羅の侵攻に備え、西辺の防備を強化した。最前線に当たる対馬・壱岐に防人と烽とを置いて敵襲に備え、大宰府の前面には防御施設としての水城を築いた。大宰府に隣接する大野・基肄二城のほか、対馬の金田城、長門、讃岐の屋嶋、大和・河内国境の高安城など、大和に達する行路の要衝にも城を築いた。これらの城は、大野城・基肄城などの遺跡によって知られるように、山頂の周囲に土塁をめぐらし、谷間を石垣で埋め、水門を設け、内部には倉庫などの礎石建物を配置した朝鮮式の山城であった。天智4（665）年、大野城・基肄城を造るために憶礼福留・四比福夫という二人の百済人を筑紫に派遣したと『日本書紀』に見えるが、これらの防衛施設の築造を指導したのは、白村江の戦いののち倭国に亡命してきた、大陸的な兵法に詳しい百済の王族・貴族であったと考えられる。

鞠智城については、大野城・基肄城とは異なり、『日本書紀』にその築城に関する記事が見えない。しかし先述したように、発掘調査によれば、鞠智城はまさしく大野城・基肄城などと共通する朝鮮式山城としての特徴を備えており、大野城・基肄城とほぼ同時期に、

共通の目的を持って建設された山城であると考えられる。最も南に位置することから見て、おそらく有明海方面からの進攻に備える目的をもっていたのであろう。平成20（2008）年度の発掘調査で、貯水池跡から7世紀後半と推定される青銅製の百済系菩薩像が出土したことは、鞠智城の築造にも百済人の技術者がかかわっていたことを示唆するものである。

二　鞠智城と古代律令制

天智天皇の没後、672年、倭国では古代最大の内乱である壬申の乱が起こる。乱に勝利した大海人皇子は飛鳥に都を置き、即位して天武天皇となり、巨大な権力を握って諸豪族の勢力を押さえ、中央集権国家の建設を推進した。

緊迫した東アジアの情勢も、この頃には大きく変化した。天智7（668）年、唐と新羅は連合して高句麗を滅ぼし、その後新羅は唐の勢力を駆逐して朝鮮半島を統一した。こうして東アジアの情勢は、中国の唐、朝鮮半島の新羅、日本列島の倭（日本）3国の関係として安定した方向に向かうことになった。そうしたなか、倭は唐に倣った律令制度の導入を急速に進め、大宝元（701）年には国家制度の基本を定めた大宝律令を制定し、翌年には初めて、「日本」の名で遣唐使を派遣した。

律令制のもとでは、中央集権的な地方支配の体制が整えられた。とくに九州＝西海道では他の諸道と異なり、大宰府による強力な権力集中のシステムが構築された。大宰府は西海道諸国の行政を統括するとともに、外交・軍事にもかかわり、財政の面でも、西海道諸国の調庸はすべて大宰府に集積された。

鞠智城が初めて文献にその姿を現すのは、大宝律令制定の3年前、文武2年のことである。そこでは鞠智城は大野城・基肄城とともに大宰府の管轄下にあり、同様に整備の対象となっている。このことは鞠智城が、新しい大宝令制のもとで、大野城・基肄城とともに大宰府の防衛体制の一環を形成したことを物語っている。

律令制度のもとでの鞠智城は、外敵の襲来に備えるという本来の目的のほかに、西海道における律令政治の推進を武力の面から支えるという役割をも担ったと考えられる。7世紀末から8世紀にかけては、九州南部の日向・大隈・薩摩から多禰・屋久・奄美など薩南諸島へと律令制的支配を進めていくことが国家の大きな課題となり、これに抵抗する隼人の反乱もいくどか起こった。大宰府から九州の中部・南部へと至る交通の要衝に位置する鞠智城は、こうした国家の政策の推進に大きな役割を演じたことが推測される。律令時代の官道である駅路は、大宰府から筑後国を経てこの地に至り、熊本平野へと向かうが、古くは『延喜式』に示される経路より東の、鞠智城の地を通過したとする説があり、現在鞠智城跡周辺に残る「車路」の地名がその遺称であるとされている。

駅路とともに大宰府を中心とする交通・通信のネットワークを形成したのが、烽である。烽は敵の襲来や外国使節の到着などの情報を速達するための通信システムで、律令制では40里（約8キロ）ごとに設置され、昼は煙、夜は火を上げて合図を送った。鞠智城でも付近に「日の岡山」の遺称地があり、大宰府を中心とする情報伝達のシステムに組み入れられていたことが推測される。

白村江の戦いの直後、天智3（664）年、朝廷は防衛の最前線である対馬・壱岐に防人と烽とを置いて敵襲に備えた。律令制のもとでは防人は諸国の軍団兵士の中から選抜され、3年交替で筑紫に派遣されるようになり、現実には東国＝中部・関東地方出身の兵士がその任に当たった。東国の兵士はその勇敢さを買われ、鎮兵として東北地方の蝦夷との戦い

にも動員されたから、その負担は重く、蝦夷との戦いが深刻さを増した8世紀の後半になると、東国防人を筑紫に派遣することは停止され、防人制は弱体化していった。

律令制のもとで鞠智城守備の主体となったのは、肥後国の軍団に所属する兵士であったと思われる。律令の軍団兵士制は唐の府兵制に倣い、20歳以上の男子を1戸から3人に1人の割合で兵士に徴発し、近くの軍団に勤務させるもので、1軍団には普通1000人の兵士が所属していた。肥後国の場合、軍団数は4であったと推定され、そのうちの一つとして益城軍団の名が知られている。

軍団と山城との関係については、筑前国の御笠団については大野城、肥前国の基肄団については基肄城との関係が考えられる。おそらく鞠智城の場合にも、周辺にその警備を任務とする軍団が存在し、兵士の訓練と城の警備とに当たったのであろう。

三　東アジアの変貌と鞠智城の終末

8世紀末から9世紀にかけて、東アジアの情勢は大きく変化した。唐は755年に安史の乱が起こって以後力を失い、周辺諸国への威圧も弱まった。唐を中心とする東アジアの政治的秩序も崩れ、諸国家はそれぞれ独自の道を歩みはじめた。

国家間の外交関係の希薄化とは対蹠的に、民間の人や物資の交流はむしろ活発化した。中国や朝鮮の商船が博多などに来航し、人々は大陸の珍奇な品々を求めてそれに群がった。唐船が来着すると朝廷は交易唐物使を大宰府に派遣して優先的に必要な物品を購入し、大宰府の官人や九州の在地有力者も貿易に利益を求めて活動した。

朝鮮の新羅では8世紀の末から内乱が起こり、飢餓も発生して治安が乱れた。新羅は豪族の張弓福（張宝高）を清海鎮大使に任じて海賊の取り締まりに当たらせたが、弓福はまた新羅・唐・日本3国間の貿易にも従事して巨利を博した。承和8（841）年に弓福が殺害されると海賊の活動は活発になり、その被害は九州にも及び、貞観11（869）年には海賊が博多に来襲し、貢納物を奪う事件が起こった。

鞠智城の名が文献に再び登場するのは、9世紀後半のこの時期のことである。『日本文徳天皇実録』天安2（858）年条には、大宰府からの報告として、菊池城院の兵庫（武器庫）の鼓がひとりでに鳴り、同城の不動倉（穀を蓄えておく倉）11宇も火災にあったと見えている。その後も『日本三代実録』には、貞観17（875）年に烏数百羽が肥後国菊池郡の倉舎の葦草を噛み抜いたこと、元慶3（879）年に肥後国菊池郡城院の兵庫の戸がひとりでに鳴ったことなどが記されている。これらは鞠智城に起こった怪異が、肥後国や大宰府管内諸国にとって兵乱などの不吉な事件の起こる予兆として捉えられたことを物語っている。

こうした事件の背景には、当時の大宰府管内諸国の置かれていた不安定な状況があった。新羅海賊の襲来への不安が高まるなか、諸国の官人や豪族を統制する力を失っていた大宰府は、彼らが新羅と結びついて反逆するのではないかと恐れていた。貞観8（866）年には肥前国の郡司らが新羅から兵弩器械の製法を学び、共謀して対馬を奪取しようとしているとの情報があり、また隠岐国の前守が新羅人と共謀して反逆しようとしているとの情報があった。それらの情報の多くは誇大かつ不確実なものだったと思われるが、朝廷や大宰府はそれに踊らされ、恐怖し動揺したものと考えられる。鞠智城に相次いだ怪異は、このような外敵侵攻の予兆と考えられたのである。

これらの記事に拠れば、当時の鞠智城には兵庫（武器庫）があり、また11宇以上の不動倉があって大量の稲穀が蓄積されており、7世紀以来の古代山城としての機能が依然とし

て維持されていたことが分かる。しかし鞠智城が、実際に新羅海賊への防衛拠点として軍事的にその役割を期待されているかというと、そうは言えない。ここでの鞠智城は、あくまでも肥後国の「武」を象徴する存在としての意味しかもっていないのである。

9世紀から10世紀にかけて、東アジア世界には交易を中心とする新しい秩序が形成されていった。日本の西端にあり、海を介して中国や朝鮮に接する九州は、その中で新たな役割を果たすようになった。大宰府や博多には中国・朝鮮の商人や医師などが居住し、九州各地の有力者も中国・朝鮮との交易に従事するようになった。そのようななか、7世紀の軍事的な緊張のなかで生まれた、土塁や城門で防備を固めた鞠智城は、ほかの朝鮮式山城と同じく、しだいにその存在意義を失っていったものと考えられる。

基調講演②

「東アジア国際関係の中の白村江の戦い」

五百籏頭　真　（防衛大学校長）

はじめに　なぜ非西洋社会の中で、日本だけが近代西洋をこなし得たか
外部文明をこなす原体験としての白村江の戦から５０年

１．白村江への道 ― 東アジア国際関係の激動

ＢＣ108　漢の武帝、朝鮮を攻略、楽浪郡などを置く

ＡＤ313　高句麗、楽浪郡を奪う。中国の朝鮮支配終る

―　朝鮮半島は、高句麗、新羅、百済の三国時代へ

475　百済、高句麗に圧され、都を漢江（漢城）から錦江（公州→扶余）へ

538　百済の聖明王、仏教を日本へ／聖徳太子摂政593－622

589　隋、中国統一／遣隋使　600冊封、607「日出づる処の天子・・・」冊封受けず

煬帝、100万の大軍で高句麗を攻め、敗退。亡国へ

618　唐帝国成立。朝鮮の三国とも冊封を受ける

642　百済と高句麗、新羅を攻める

645　唐の太宗（李世民。629－649）高句麗対代へ

新羅の王族・金春秋（603－661）の活躍

642　高句麗、647大和、648唐へ（太宗の知遇）

654　武烈王に（～661）即位。唐こそ東アジア国際関係の最重要要因と判断し、新羅を唐風の律令国家に改革。649唐の高宗（649－684）との同盟に成功

660　唐軍（13万）と新羅（５万）の大軍、百済の都・扶余を攻略（落花岩の悲劇）

百済残党の再興運動、皇子・餘豊璋の帰還と援軍を大和に求む

661　斉明天皇（655－661）、中大兄皇子とともに出兵を決定。筑紫へ赴き没す

663　２万７千の大軍侵攻。唐・新羅の連合軍に完敗

『日本書紀』　日本軍は「気象を観ずして」・・・「我等先を争はば、彼まさに自ら退くべし」と進軍。大唐軍は「左右より船をはさみてかこみ戦う。ときの間に官軍敗れぬ」

大和の大軍は、戦場の実情も敵の戦力や作戦も詳らかにせず、策なき精神主義で討ちかかり、歴史的大敗北（敗北の本質）

２．敗戦にめざめ、大躍進する大和 ― 防備と学習

（１）唐・新羅連合軍の来襲を期し、迎撃・防備体制を布く

664　大宰府に水城を築き、対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を配備。３年任期で東国を中心に全国より防人参集（自弁）

665　大宰府の防衛強化、大野城、基肄（きい）城を築き、後方支援基地として鞠智城を築いたものと思われる。大宰府陥落の場合は鞠智城が反攻拠点に

667　迎撃体制強化 ― 対馬に金田城、讃岐に屋島城、生駒山に高安城などを築く。

667　天智天皇、都を近江大津へ遷す

671　唐の47隻の艦隊来航 ― 日本攻略ではなく、対新羅共同戦線を求む

668年　新羅は唐の力を借りて高句麗をついに滅ぼし、朝鮮統一を達成したが、

671年　新羅は唐を半島から駆逐。唐は新羅懲罰を想う。

671　天智天皇崩御。大和は二度と軽挙せず。

（2）唐文明に学び、世界水準を達成 ― 50年後に平城京

664　国制改革に着手、戸籍を全国に。律令国家の制度を学ぶ

710　平城京　完成

3．日本の外部文明への対応の型

こうして、日本は白村江の敗戦後50年間に、独立を失うことなく、当時の世界最高水準の唐文明に学び、その水準を国内化することに成功。これが日本の外部文明に対する対応の型となった。この二重的対応のＤＮＡは近代西洋文明に対しても発動された。

・1853　黒船襲来から50年後、1905　日露戦争の勝利

「攘夷」（自立性と民族的プライド）と「開国」（秀れた外部文明の学習）

・1945　太平洋戦争の敗北から40年で、世界第２の経済大国に

おわりに　敗北なしに新たな対応のできる日本に

鞠智城を用意した、奥行きのある対処に学べ

報告

「鞠智城の調査成果」

矢野　裕介（鞠智城跡発掘調査主任）

1　概要

鞠智城跡は熊本県の北部、山鹿市菊鹿町米原から菊池市木野にかけて所在する古代山城である。『続日本紀』文武天皇２年（698）の条の繕治記事を初見として、その後、『日本文徳天皇実録』天安２年（858）の条、『日本三代実録』元慶3年（879）３月の条にも記録として残る、いわゆる「朝鮮式山城」で国史跡に指定（指定面積：約64.8ha）されている。

城跡は、県境を限る筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高1.051m）南西麓の丘陵端部、南の菊池平野との比高差100m程の低丘陵上に立地する。阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川の中流域に位置し、河口より直線距離で約30km を測る。標高145m前後の通称「米原（よなばる）台地」を中心に、北と南に２つの谷を取り込んだ包谷式の山城で、周長3.5km、面積55ha、標高90m（池ノ尾）～171m（シャカンドン地区）の範囲を内城地区と呼称し、真の城域とする。

昭和42年度の第１次調査から続く発掘調査により、72棟の建物跡をはじめ、貯水池跡、土塁跡、水門跡を検出するなど、全体構造の解明が進んでおり、百済系菩薩立像、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、木簡（「秦人忍□五斗」）など、築城の背景及び城の機能を推察できる遺物も蓄積されている。

2　調査の成果

（１）建物遺構

城の中枢域となる長者原地区を中心に、72棟分の建物跡を検出している。その内訳は、掘立柱建物跡47棟、礎石建物跡25棟で、建物規模、柱配置、柱間寸法により細分化される。掘立柱建物跡は、建物形状がわかるもので、総柱建物16棟（八角形建物跡3棟を含む）、側柱建物26棟を数え、側柱建物のうち2棟（24、27号）は一面庇の建物となる。一方、礎石建物跡はすべて総柱建物で、3間9間の長倉形式の建物跡（49号）や側柱を掘立柱とする礎石・掘立柱併用建物跡（11、12、29号）がある。また、長者原地区北東側には、溝で区画されたＬ字形配置の建物群（60～66号）が検出されており、「管理棟的建物群」と位置づけられている。

（２）城門遺構

城域の南側、深迫、堀切、池ノ尾の三箇所で、門礎石の存在から門跡が推定されている。このほか、城域北側の飛渡にも、地形的な理由から門跡が想定されている。

城門周辺の城壁については、これまでに、深迫では版築土塁、堀切では堀切状の通路と切・盛土を併用する2段構造の城壁、池ノ尾では通水溝を持つ水門がそれぞれ確認されており、自然地形に応じて構築されたことが判明している。

門礎石はいずれも掘立柱形式のもので、上面の縁近くに直径16～20cm 大の円形の軸摺り穴を穿つ。うち堀切門礎石は、1石に約2.7m間隔の両扉分の軸摺り穴と縁部に柱を当てるための円形の刳り込みが認められる。いずれの門礎石も原位置から動いており、現在のところ、堀切門の構造を推定したほか、門構造の解明にまでは至っていない。

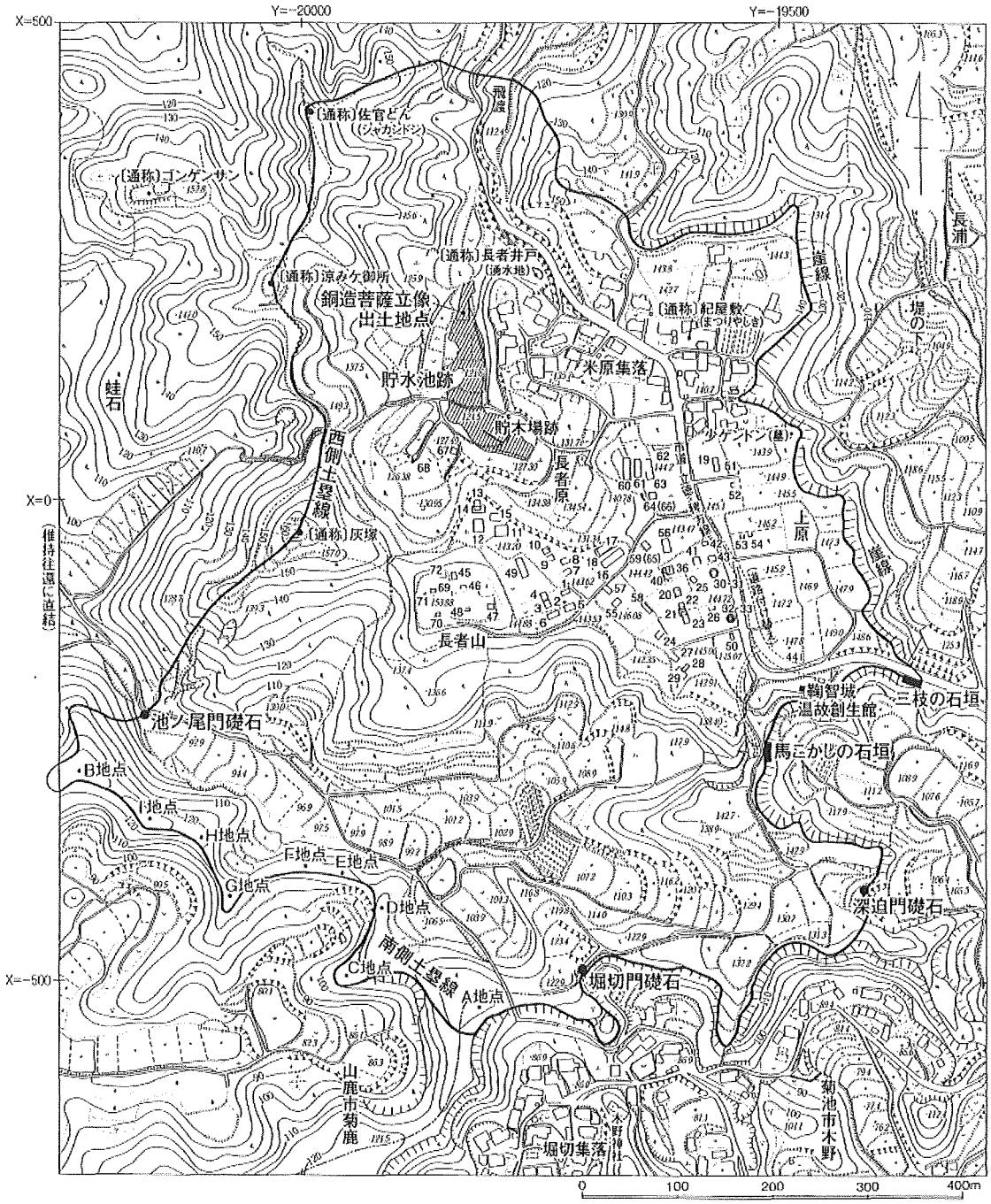


図１　鞠智城跡全体図　＊大田幸博ほか　2009　第３図を転載

（３）土塁線

城域の南縁、西縁の城壁線上に、土塁的景観を色濃く残す尾根があり、それぞれを南側土塁線、西側土塁線と呼称する。

南側土塁線では、その西端部で残存高5.0～8.0m、裾部に石列を配する2段構造の土塁が検出され、その後、東端部の一部で土塁盛土が確認されことから、土塁の構築が総延長500mの土塁線すべてに及ぶことが推定された。一方、西側土塁線においても、その北端部（シャカンドン地区）で推定高3.6mの土塁を検出し、土塁前面と背面に版築工法を示す柱列も確認されている。

このほか、城壁線上には、「馬こかしの石垣」、「三枝の石垣」という2つの石積みが認められるが、現在のところ、後世の構築と考えられている。

（4）貯水池跡

城域の北側谷部に位置する池遺構である。谷地形に沿う南北に長い形状で、水成粘土堆積層の拡がりから約5,300㎡の規模が推定されている。

これまでに、取水口、石敷遺構、貯木場跡、木組遺構（水汲み場跡）、堤防状遺構、柱列、池尻部等が検出され、主として湧水を貯め、中途に小規模な堰堤を設けることによって水量を調整する貯水構造が明らかとなっている。また、飲用水はもとより、建築部材等の貯木など多岐に亘る用途が推定されている。

また、池尻部の最下層から、全高12.7cm（像高9.7cm）の銅造菩薩立像が出土しており、その形態的特徴から7世紀後半の百済系仏像であることが指摘されている。

3　建物遺構の時期区分と変遷

今回、これまでの調査成果と建物方向を踏まえて、一部の切り合い状況に認められる掘立柱建物跡→小型礎石を伴う礎石建物跡→大型礎石建物跡の変遷を軸に、建物遺構の時期区分と変遷について整理を行った。その結果、長者原地区西側一帯の掘立柱建物群を除き、次の3期の時期区分と変遷が考えられた。

【第Ⅰ期】

北にコ字形に配置された大型掘立柱建物群を置き、その南側一帯と長者山の掘立柱建物の倉庫を配置するなど、古代山城としての機能が整った段階である。創建期あるいはそれに近い時期に推定される。19・26・31・32・35・40・41・42・43・52・54・62・63・69・70・71号を当該期に推定した。

【第Ⅱ期】

第Ⅰ期の建物配置を踏襲しながら、一部に掘立柱建物から小型礎石を伴う礎石建物に建て替えが行われる段階である。第Ⅰ期の次の段階として、8世紀前半に推定される。当該期に出現する建物跡は22・23・34・37・50・65・66号と考えられる。

【第Ⅲ期】

小型礎石を伴う礎石建物が大型礎石建物に建て替えられる段階である。8世紀後半から終末までの時期に推定される。当該期に出現する建物跡は、11・12・13・20・21・36・45・46・47・48・56・59・64・72号と考えられる。

以上が、建物遺構の時期区分と変遷案であるが、現状では、長者原地区西側一帯の掘立柱建物群の時期的位置づけあるいは礎石建物の出現期の問題など、出土遺物との整合性が図られていない部分も多くある。今後、遺構・遺物のさらなる精査により、建物の消長も含めて具体的な検討を加えていく必要があろう。

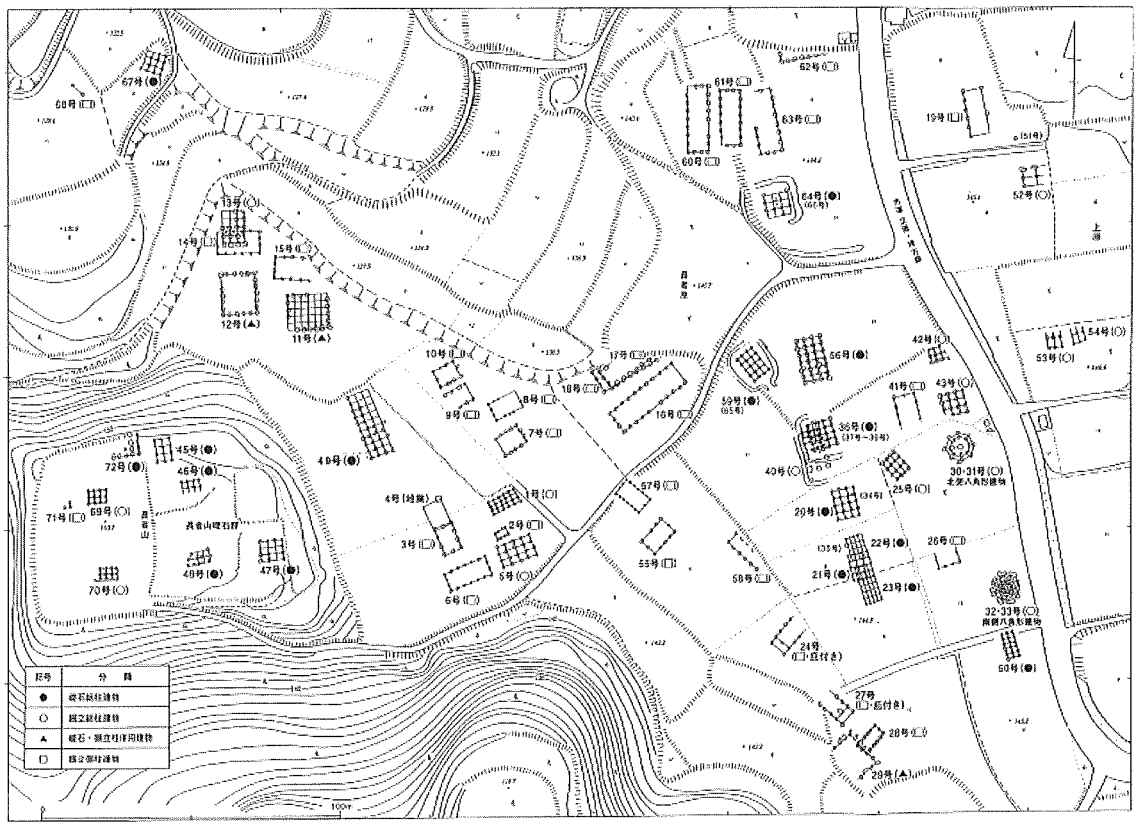


図２　長者原地区　建物検出状況　　＊大田幸博ほか　2009　第４図を転載

4　今後の課題

鞠智城は、『続日本紀』文武天皇2年（698）の条の繕治記事から、『日本三代実録』元慶3年（879）の条の怪奇現象を伝える記事まで、文献上、少なくとも181年以上存続した城である。この間、幾度となく補修、改築等を繰り返しながら城を維持してきたと思われるが、その時期区分と変遷を解明することは、鞠智城の役割・性格を考える上で、きわめて重要な作業といえる。今後、より具体的な検討を加え、他の遺構の構築年代も含め、鞠智城の全体像を明らかにしていきたい。

《参考文献》

大田幸博ほか　2009　『鞠智城跡 - 総括報告書 -』　熊本県教育委員会　ほか

《発表①》

朝鮮半島から見た鞠智城

西谷　正（九州歴史資料館長）

はじめに

鞠智城は、特別史跡の大野城・基肄城・金田城などとともに日本の正史に記載された、きわめて重要な古代山城である。鞠智城に対する研究は、すでに早くから、文献史料に基づいて行われると同時に、その遺跡が現在の熊本県の山鹿市と一部が菊池市に属するところから歴史地理学的にもアプローチされてきた。さらに、1967年（昭和42）からは、熊本県教育委員会が本格的な発掘調査を実施し、2010年度には第32次を数えるに至っている。

その間に得られた考古学的な調査成果には、測り知れないほど大きなものがあるといえよう。そのうち、日本の古代山城において、いまのところ他に類を見ない重要成果を朝鮮考古学の立場から整理しておこうと思う。

Ⅰ　日本古代山城の中の鞠智城

(1)　立地と構造

鞠智城には、すでにしばしば指摘されてきたように、その立地と内部構造に特徴がある。古代山城の多くは最高所が、標高300m付近に立地するのに対して、鞠智城はそれが標高169mで、平野部との比高差が100mと比較的低いところに築かれている。そして、そのこととも関連すると思われるが、山城内部に比較的広い平坦面を持っている（岡田茂弘氏指摘）。ここで注目したいのは、山城内部で検出された72棟の建物群の中には、各地の山城において特徴的に見られる倉庫群などのほかに、官衙施設を思わせるコ字形に配置された建物群と、平面形が八角形の建物が日本の古代山城では初めて認められたことである。この点は、鞠智城の九州内における地理的位置や古代官道などとの関連で、鞠智城の性格を考える上で重要になってくる。それはともかくとして、鞠智城の立地と構造は、いわば山城と平地城という二面性を兼備しているといえるのではなかろうか。

(2)　八角形建物と貯水池

鞠智城において、もっとも特筆される遺構は八角形建物である。1991年（平成3）に実施された第13次調査に際し、構造がわずかに異なる2棟が南北に併存する形で検出された。その機能については、鼓楼と推測され、復元整備されている。

そして、鞠智城の城内北寄りの谷合で認められた貯水池跡は本格的なもので、一部で貯木場として利用されるなど、日本の古代山城では初めて発見されたものである。大野城の場合、頂上部に残る鏡池と呼ばれる小さな池や、城内の別の地点に設けられた石組みの井戸のような人工的な水源のほか、谷合の沢の水も水源として利用されたであろう。しかし、鞠智城よりはるかに大規模な大野城には、大規模かつ本格的な人工の貯水池は設けられていないのである。

(3)　木簡と仏像

先に述べた貯水池跡からは、やはり日本の古代山城では初めて、木簡と仏像が出土して注目を集めた。木簡には、「秦人忍□五斗」の墨書があり、秦人という渡来人の係わりが指摘されている。

さらに、ごく最近の2008年に行われた第30次調査では、貯水池跡の池尻部において石積

による堰堤部が検出されたこともさることながら、その近くで百済系の菩薩立像が発見されるという重要成果がもたらされた。ちなみに、1979年（昭和54）当時の菊鹿町教育委員会が町道拡幅工事に伴って実施した第5次調査の際、鞠智城で初めて百済系の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

Ⅱ　朝鮮半島から見た鞠智城

(1)　立地と構造

まず、北部九州における鞠智城の位置を考えることにしたい。大野城と基肄城が大宰府と直接に係わる山城であったことはいうまでもないが、同時に鞠智城も同じコンテキスト（文脈）で考える。その理由の第一は、いずれも7世紀後半に築造が開始されている点である。このことが、結果的には、『続日本紀』文武天皇2年（698）の条に見えるように、大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治させた、という記録となっているのであろう。当時における対外交流の主要なルートは、博多湾岸から壱岐・対馬を経て朝鮮半島東南部へ至るものであったろう。このルートは、いわばヤマト王権による国家的なレベルのものであろう。それに対して、菊池川下流域から有明海に出て壱岐・対馬へ向うルートは、菊池川流域などの豪族による地域的なレベルのものといえよう。このことを示すのが、500年前後に営まれた江田船山古墳出土の金銅製装身具や土器に見られる百済系遺物である。また、同じ有明海経由という意味では、菊池川下流域からは南方に、5、60km離れた球磨川下流域を本拠地とした火葦北国造が百済との係わりを持っていた。すなわち、『日本書紀』敏達天皇12年の条は、火葦北国造で刑部靫部阿利斯登の子である日羅が百済の高級官僚である達率の身分であったことを伝える。また、同じく推古天皇17年（609）の条によると、筑紫大宰は、百済の僧侶10人と俗人75人が呉に向かったが入国できず帰途に着いたところ、暴風に遭って漂流し、葦北津に漂着したことを奏上している。つまり、火の国の有明海沿岸部の諸豪族が百済との交流を持っていたことをうかがわせる。このような有明海地域であってみれば、白村江の敗戦に際し、有明海沿岸部の防衛体制を堅固にするべく鞠智城を築いたと考えるのがもう一つの理由である。

以上に見てきたように、博多湾側の大野・基肄城と有明海側の鞠智城は、後の8世紀の『万葉集』に歌われた言葉ではあるが、大宰府を「遠の朝廷」と見たてて周辺に配置された山城群であったと考える。このような概念は、改めて例示するまでもなく、百済のみならず高句麗・新羅・加耶の王都と、それを取り巻くように配置された山城群にその系譜が求められよう。

朝鮮半島三国時代の王都においては、平地城と山城がセットの関係で築かれた。その典型例は、高句麗中期の王都があった、中国大陸東北部の現在の吉林省集安市に残る遺跡群に見ることができる。すなわち、日常平時の平地城である国内城と、その北西約2.5ｋｍのところに位置し、一旦危急時の逃げ込み城（山城）である丸都山城の関係において知ることができる（第１図）。

百済では中期の忠清南道公州市の公山城と後期の同じく扶余邑の扶蘇山城について、それぞれ熊津時代と泗沘時代の山城と考えられたことがある。そして、王宮は、それぞれ公山城と扶蘇山城の南麓の平地にあって、それぞれの背後の山城とセットの関係で考えようとされた。そのうち公山城南麓一帯は、かつて礎石の存在が指摘されたことはあったが、その後の都市化で未調査のまま市街化した。それはともかくとして、1980年ごろから実施

された、公山城内部の発掘調査の進展に伴って、『三国史記』東城王22年（500年）に臨流閣を宮の東に建てたと記録する建物跡などの建物群や、上面の直径7.3mに、深さが3mの石組み池跡などが検出された（第2図）。ちなみに、公山城のある丘陵は標高110m付近に立地する。そして、扶蘇山城を見ると、その南麓の平地に当たる官北里では金銅製品などの手工業製品の工房跡は認められたものの、王宮跡を示す建物群は認められなかった。ただ、2006年度の調査では、西南麓の平地において、7間×4間（35×18m）の大型礎石建物が初めて発掘され、今後のさらなる解明に期待が寄せられている。とはいえ、標高100m前後の扶蘇山城の内部を見れば、早くから知られてきた倉庫群に加えて、半地下式の建物群も検出されている。そのほかにも、建物跡の存在をうかがわせる平坦面が数ヶ所で認められるので、建物群はさらに増える可能性がある（第3図）。そうなってくると、ここでも山城と平地城を兼ね備えた城郭であった可能性が出てくるのではなかろうか。

(2)　八角形建物と貯水池

日本の古代山城で初めて、鞠智城において検出された八角形建物の類例を国内外に探すと、まず前出の高句麗中期の山城・丸都山城において見出すことができる（第４図）。丸都山城内部の本格的な発掘調査が2001年から2003年にかけて実施されたところ、宮殿跡の建物群11棟が検出された。その中に、八角形礎石建物2棟が併立していた（第5図）。ここで、宮殿跡は王宮と官衙からなり、軍事・防御性に重点を置いたものとされる。そして、当時の気候条件から考えて夏期の宮殿ともいわれるが、八角形建物の性格については明らかにされていない。

丸都山城では、2003年に宮殿跡の南方100数十ｍの位置にある貯水池跡が発掘調査された。その結果、石積護岸を持ち、平面隅丸方形の一辺が35～37m、周囲の長さ146.3m、残存高1.8mの規模であることがわかった。池の内部からは、土器・鉄鏃・鉄釘などのほか、牛・馬・犬などの動物骨が出土した。山城においては、食糧・武器・武具などの軍需物資と合わせて、水源の確保はもっとも重要なものである。この点に関して、興味深い逸話を紹介しておこう。『三国史記』高句麗本紀の大武神王11年（Ａ．Ｄ.28）の条によると、漢の遼東太守が兵を率いて高句麗に侵入してきた。その際、王は群臣の進言にしたがって、尉那巖城すなわち丸都山城に入り、数十日間にわたって籠城した。しかし、漢の兵は包囲を解かなかったので、王の力は尽き、兵は疲れた。そこで、群臣の一人が、漢人たちは城内に水泉がなく、永く包囲して高句麗兵の困窮を待っているので、池の鯉をとって水草に包んで送り、合わせて酒類を少し送って漢軍をねぎらうのがよいと進言した。王はそれにしたがい、それらを手紙とともに送った。その結果、漢の将軍は城内に水があるから、短期間に城を落とすことはできないとして引き上げたというのである。

なお、八角形建物の類例を求めると、城郭では新羅の二聖山城や、日本の奈良時代の難波宮跡で知られる。また、仏教寺院関係では高句麗の定陵寺跡や、日本の白鳳時代の樫原廃寺跡の塔跡において見ることができる。そして、貯水池の典型例は、高句麗の竜潭山城（第6図）や新羅の二聖山城などがよく知られる。ちなみに、高句麗の大成山城は、城壁の全長7076mを測る大規模なものであるが、内部に池が170ヶ所もあるといわれる（第7図）。

(3)　木簡と仏像

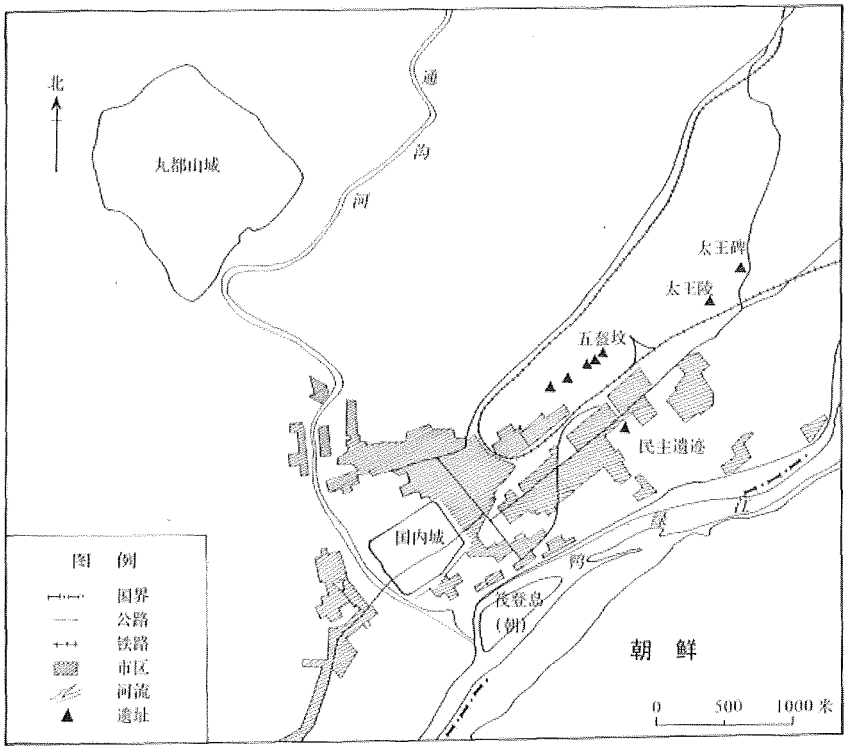
鞠智城出土の木簡は、秦人の忍が租税として、おそらく米五斗を納めた際の荷札と考えられている。朝鮮半島では、南部の各地で木簡の出土例が増加の一途をたどっているが、そのうち咸安城山山城の木簡を紹介しておきたい。城山山城はもともと阿羅加耶の王都の

防衛を担っていたが、532年に新羅によって併合された後は、新羅の山城として使われた。出土した113点の木簡は、新羅による併合直後のもので、各地から貢納された物品の荷札が含まれる。木簡に記載された物品は、稗・麦などの穀物である。二聖山城も、初築は百済にさかのぼる可能性が残っているとはいえ、確認できるところは新羅のものである。ここでも29点の木簡が出土したが、その中に、荷札や物品名を記載した木簡が含まれているようである。

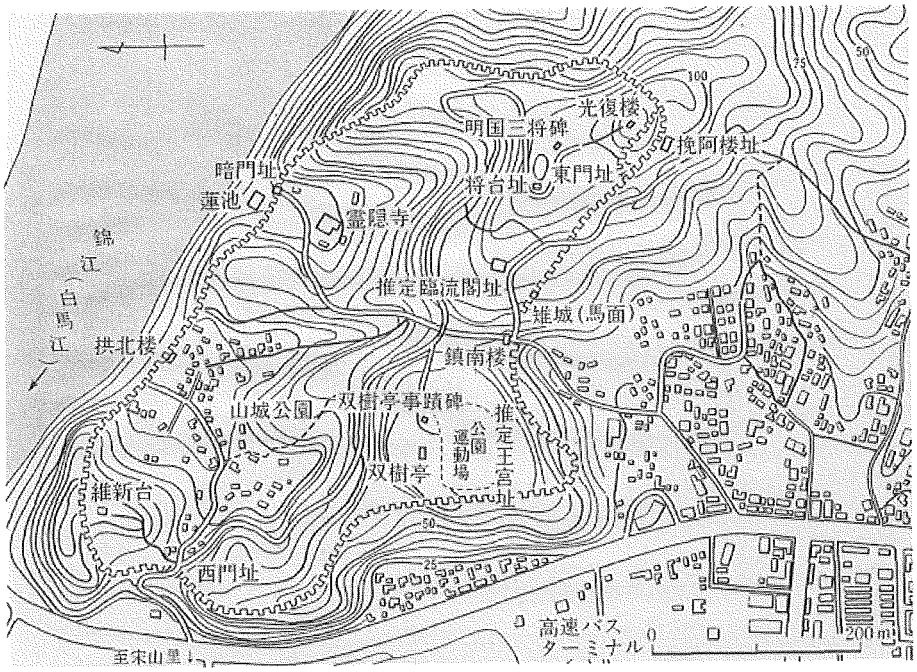
朝鮮半島において、山城内から仏像が出土することはほとんどないといえよう。その中で、高句麗後期でも初期の平地城であった安鶴宮の背後に大成山城が築かれた。ここで城壁の石塁が崩壊したときに、石龕が出土し、その中に金銅製の高さ8.5ｃｍの仏像が入っていた。仏像は真綿に包まれ、香木が添えられていたという。調査者は大成山城の守護神として製作し埋納されたと考えている。また、前述の公山城においても、貯水池の中から、統一新羅時代のものではあるが、金銅製仏像が出土している。

おわりに

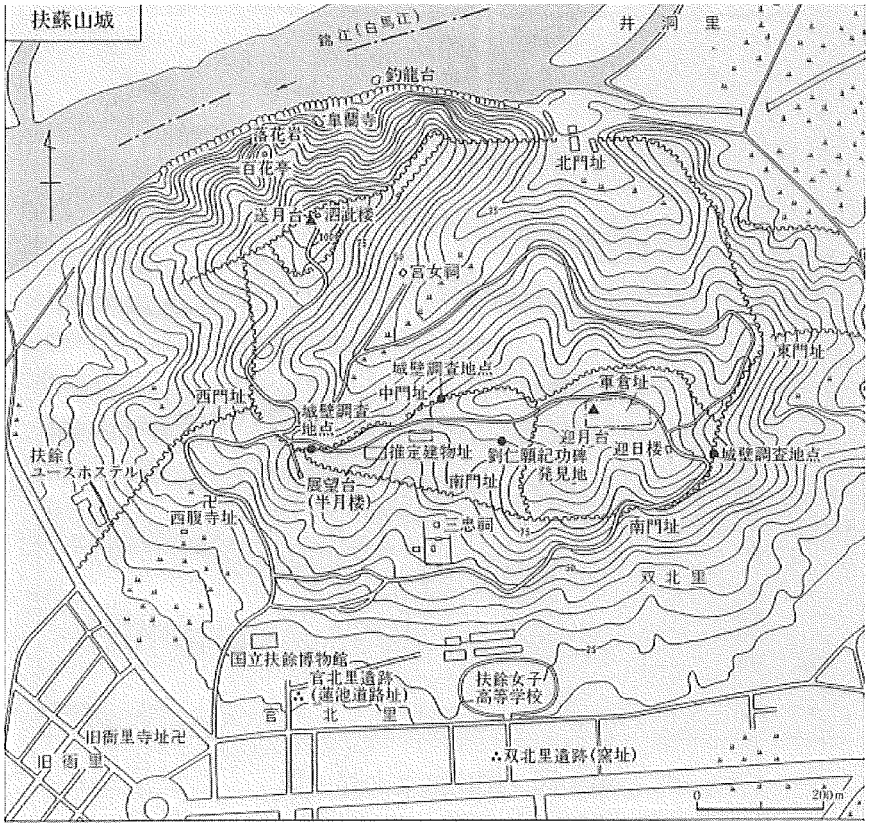
以上のように見てくると、鞠智城の日本古代山城における重要な位置と、築城の契機となった白村江における敗戦という国際情勢に鑑みて、朝鮮半島の山城との関連性などが浮かび上がってきたといえよう。一方、前述の咸安城山山城の場合、加耶から新羅の山城へと機能転換が起こった6世紀中ごろ以後、新羅はここを軍事的拠点として百済や倭に備えた。そのため、全国各地から徴発した軍需物資の出納・保管や駐屯兵士の名簿作成などが行われたことが、出土した木簡類からうかがえる。ひるがえって、鞠智城においても、8世紀以後、律令体制による国家の安定化に伴って、大宰府の西海道・南島に対する内政の南方拠点として重要視されていったのではなかろうか。



第１図　国内城と丸都山城
（吉林省文物考古研究所・集安市博物館、2004『国内城』文物出版社による）

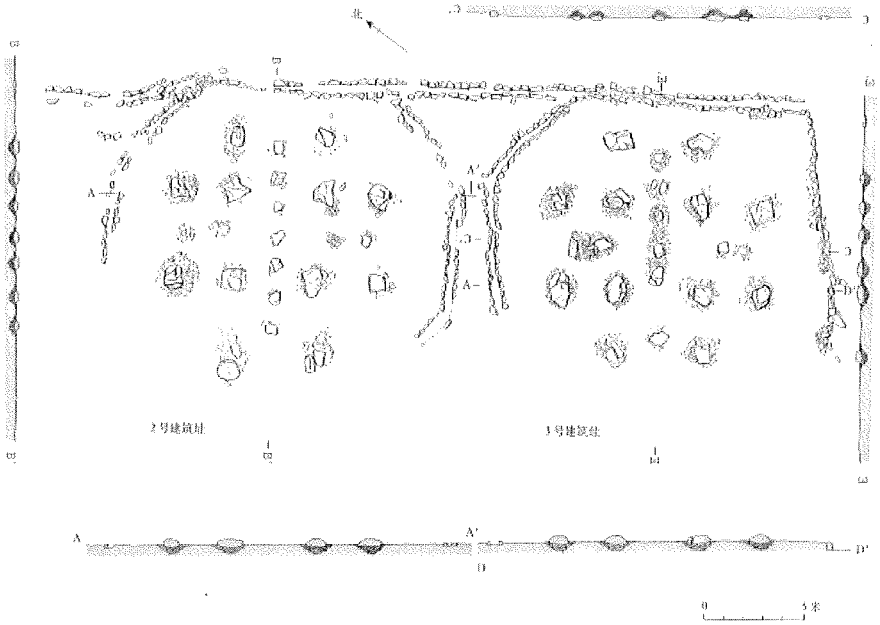


第２図　公山城平面図
（東 潮・田中俊明、1989『韓国の古代遺跡』２　百済・伽耶篇、中央公論社による）



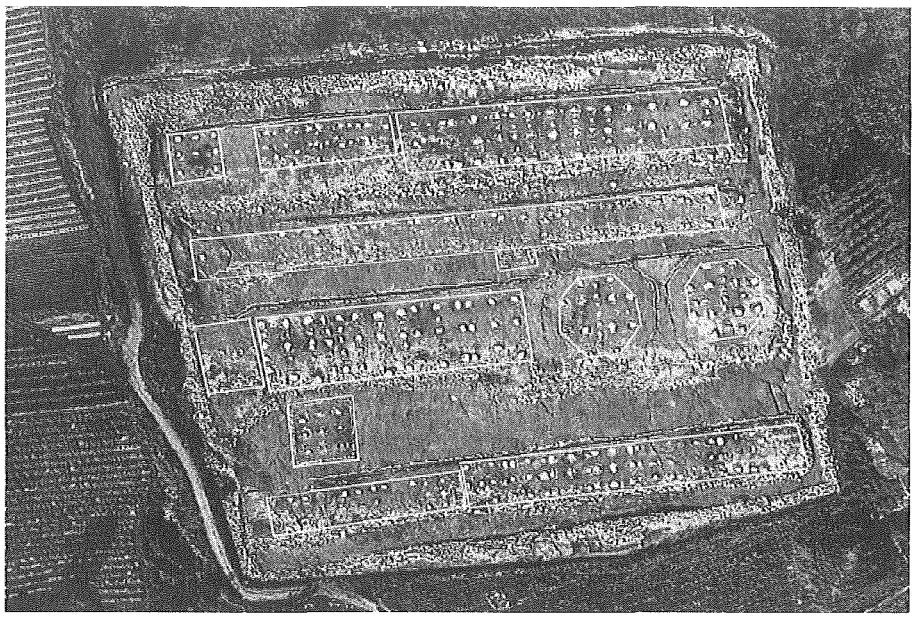
第３図　扶蘇山城平面図

（東 潮・田中俊明、1989『韓国の古代遺跡』２　百済・伽耶篇、中央公論社による）



第４図　丸都山城の八角形建物

（吉林省文物考古研究所・集安市博物館、2004『丸都山城』文物出版社による）



第５図　丸都山城宮殿跡と八角形建物
（吉林省文物考古研究所・集安市博物館、2004『丸都山城』文物出版社による）

第６図　中国・竜潭山城　貯水池

第７図　ピョンヤン・大成山城　貯水池

《発表②》

「７世紀日本の国家形成と東アジア～鞠智城造営の背景～」

鈴木　靖民　（國學院大學教授）

１　唐帝国のエクスパンション

熊本県山鹿市にあった鞠智城は長年にわたる遺跡の発掘調査により、７世紀後半から９世紀にかけて菊池平野、有明海に通じる菊地川を望む台地状丘陵端部に造営された、内陸部の特色のある山城とされる。文献では『続日本紀』に698年（文武２）、藤原京の政府が大宰府に管轄下の大野、基肄、鞠智３城の修築を命じたというのが初見である。その後、国史は９世紀、858年（天安２）、879年（元慶３）に肥後国菊池城院として存続したことを伝える。

鞠智城の変遷は３期にわたるとされるが、その軍事的目的、性格については、これまで北部九州の兵站基地、前進基地としたり、攻守両用の内城とみて外城があると想定したりする考え、肥の大宰のような軍政、民政の拠点であったという仮説などが様々に提出されている。

この報告では、鞠智城が『日本書紀』にみえる大野、基肄２城と同時期の665年（天智４）に築城が始まったという通説をふまえて、その初期の国家形成と東アジアの動きを述べてみる。

７世紀初めから半ばにかけて、東アジアを含む東ユーラシアの国際情勢は緊迫した状態にあった。隋に代わった唐の帝国は国力を振るい、西は新疆ウイグル（東突厥）、チベット（吐蕃）、南はベトナムを支配し、東も朝鮮半島（高句麗、百済、新羅）への侵略を企てた。太宗、高宗の時、隣接する高句麗の臣従を強いる征討を続け、655年（永徽６）、百済が高句麗、靺鞨とともに新羅を攻めたことにより、新羅武烈王の要請に応え、高句麗攻撃を始め、658、659年と遠征した。660年（顕慶５）、百済を先に討つ戦略に転じ、蘇定方の率いる水陸10万余の大軍が金庾信の新羅軍と合流し、白村江を溯って都の泗沘（扶余）を襲い、義慈王を追って旧都熊津（公州）を陥れた。百済の遺臣たちは周留城に拠り、倭国に復興のための救援軍と滞在する王子余豊璋の送還を求めた。倭国は政府、王権中枢を北部九州に遷して臨戦態勢をしき、瀬戸内、北部九州、ついで全国的な豪族軍の徴発と２度に及ぶ派兵を行い、663年、白村江口での倭国軍と唐軍、新羅軍との海戦の末、倭国の大敗北に終った。

618年（武徳元）、統一帝国を形成した唐は、皇帝権力の確立、拡大のために「周辺」、「辺縁」諸国に武力を伴う冊封、羈縻政策を取り、640～650年前後に全盛を迎えた。諸国に唐の制度、文化が波及し、そのリアクションは、東アジアにおける権力集中をめぐる争乱、変革となって現われた。642年、高句麗の泉蓋蘇文が権力を握った政変、643年からの百済の義慈王の独裁的な政治、647年、新羅の毘曇の政変と唐風政策である。西方では630年東突厥、635年吐谷渾、640年高昌（トウルファン）が唐の羈縻支配に服し、漢人の藩属国と化した。641年、高句麗に唐使が来て高昌の征服を報じ、脅威を与えた。対して東の百済は反発して高句麗に付き、新羅を攻め、その朝貢路を遮った。新羅は唐に接近した。

倭国もこの情勢にかかわり、朝鮮半島諸国との外交路線の争いが政策実現と密接な皇位継承と絡んで政治変動を起こした。645年（大化元）の乙巳の政変であり、以後、王権による国家確立を目ざす列島支配の長期の変革が、672年の壬申の内乱を挟んで続く。倭国

各地の山城造営もこの一環に位置付けられるであろう。

2　百済との関係、百済人の国政参画

７～８世紀の倭国の飛鳥文化、天平文化は、隋唐、およびそれ以前の南北朝の宗教、思想、文化のほか、朝鮮半島の百済、高句麗、新羅の文化を順次選択的に取り入れ、融合しながら形成された。倭国が最も親密な交流を持ったのは、６世紀半ばの仏教公伝に知られる百済との間であり、百済は高句麗、新羅と対抗するなかで、倭国の軍事協力をえるために最先端の文化を諸学の博士の交代制を通して伝えた。６世紀末、７世紀初めには百済の寺院造営や仏像製作の工人が渡来したと『日本書紀』などが記し、実際、最近の扶余の王興寺で出土した舎利容器、舎利荘厳具、瓦などと飛鳥寺との類似性、共通性に窺われるように、推古朝の王権を構成する天皇、皇族、蘇我氏などが支配層の秩序化のイデオロギー、王権の仏教として受容した。同時に、恵慈に代表される高句麗の僧、寺院や新羅の僧、寺院も飛鳥仏教に影響を及ぼした。舒明朝の百済大寺造営により初めての勅願寺院が建てられた。

ついで７世紀後半には、朝鮮半島諸国の護国思想に倣い、かつ仏塔建立を競って、天武朝以後国家仏教化を本格的に志向し、とくに華厳経に基づく新羅仏教の摂取が新羅人僧俗の渡来、留学者の習得を通して文字文化、文字技術の導入とともに進んだ。

最近、扶余双北里の百済の官庁の倉庫跡付近で出土した「貸食記」木簡は、618年の百済官人に食稲を貸与し、元本に50パーセンの利息を付けて秋に回収する時の記録であるが、この方式が8世紀律令制下の日本国に独自とされた公（官）出挙制に酷似するといわれる。貸食制は３世紀の江西省の呉の走馬楼竹簡の貸米制にみえ、漢代に源流があるとされる。北周にも出挙制があり、北朝または南朝より百済に入って採用されたであろう。倭国でも孝徳朝に「貸稲」、天武朝に「貸税」があり、670年から680年代の大宰府や近江などの出挙木簡に「貸稲」の語が使われて、出挙の前身があったと裏付けられる。７世紀後半、天智、天武朝頃に百済の貸食制が諸制度とともに伝えられたであろう。このほか、双北里の別の地点で、「那尓波連公」とある７世紀の木簡が出土し、吉士集団が携わる百済との交流のなかで、倭国から送られた荷物に付いていたと考えられる。

『日本書紀』によると、660年以後の百済の滅亡、白村江の戦いに際して百済の官人、知識人が渡来し、実務に長け、技術技能を帯びたエリート、テクノクラートが倭国王権に参加した。このことと百済モデルの制度や政策とは関係が深い。663年（天智２）、百済の重臣たちが移住し、665年、王権は百済と倭国の官位の対応を調査し、倭国の冠位を授け、663年に来た百済人を長門、筑紫の築城のために派遣した。天智王権は軍事技術を持つ百済官人をすぐに倭国で活用したのである（高句麗的な包谷式山城にも関与した蓋然性がある）。この百済人の登用策は続けられ、王権で大きな力を持った。最近、『日本書紀』の編纂に百済人が関与し、朝鮮関係記事の採録、記述に大きな影響を有したことも強調されている。この点に留意すれば、『日本書紀』の７世紀の朝鮮関係記事に亡命した百済人の意志の反映を読み取るべきかもしれず、白村江の戦い後、664年の対馬、壱岐、筑紫などに防人を置き、烽を設け、筑紫に水城の築き、山城を置くという記事は政府の記録によっているにせよ、文献に見えない瀬戸内両岸～大和に分布が確認される山城と百済人の関係も極めて深いものがあるであろう。

鞠智城は外郭を土塁で囲繞し、多数の瓦葺を含む食糧倉庫群が置かれて存続した軍事的

機能を基本とする山城であろう。８世紀頃の二つの八角形建物が何の施設であり、どのような外来思想に根ざすかは不明であるが、2008年、貯水池跡で出土した７世紀後半の百済系の銅造菩薩立像は、造営にかかわった百済人、その仏教にゆかりのものではなかったかと想像される。

3　東ユーラシアへのひろがり

７世紀の東ユーラシアの動きを考えると、唐の東西諸国が空間として離れていても連鎖する歴史事実が認められる。唐の高句麗征討は百済滅亡後も666、667年と続く。ところが668年（総章元）、唐は高句麗の泉蓋蘇文死後の内紛、百済、新羅の対立する形勢に乗じ、高句麗を滅ぼして獲得するが、勝利した将軍薛仁貴がただちに踵を返して退却し、西北の強敵吐蕃と戦い、２年後には唐の藩属国の吐谷渾が吐蕃のために滅ぼされてしまう。王小甫氏はこれを「東西の形勢、遥かであるが相呼応し、彼此起伏してあたかも符合する」と述べる。最近、菅沼愛語氏は670年からの唐と吐蕃の３次にわたる戦争と唐の敗北を契機にして新羅が唐を駆逐して朝鮮半島を統一し、突厥の復興、契丹の反乱、渤海の建国という動きが緊密な交流を有しながら存在し、日本にも唐、新羅、高句麗から文化、制度が直接のインパクトとして及んだと見通している。

７世紀の日本、当時の倭国の社会の細部を列島のなかのみでなく、また唐や朝鮮半島などの東アジアとの関係や交流だけへの注目にとどまらず、東ユーラシアの広がりのなかで理解する可能性が示唆されているであろう。

８世紀半ばには、藤原仲麻呂政権による渤海と結んでの新羅征討計画が実施される。これを渤海が伝えた唐の安史の乱、さらには西トルキスタンのタラス河畔の戦いで、ソグディアナ諸国とアッバース朝イスラムの連合軍とに高句麗出身の高仙芝の唐軍が敗れたことを渤海が好機と捉えたとみなして、宗教、戦争、外交、内政をユーラシア規模で構想する仮説もある。

９世紀前半の新羅の張保高（張保皐）の勢力による新羅、唐、日本を股にかけ、国境を超えた海上交易活動も、新羅王権や大宰府、王臣家の政治的経済的利害と相まって繰り広げられた。張保高の活動は、唐で新羅人集団のネットワークと結び付いており、日本の遣唐使にも協力した。

これらの連鎖性は、基本的には唐（中華）を中心に置いて、唐に接する東西の諸国が弧状を描きながらいずれも「周辺」にあり、倭国（日本）がその「辺縁」にあるという諸関係の国際構図の存在ゆえであり、それに東ユーラシアの長期波動ともかかわっているであろう。

おわりに

７世紀後半に始まる西日本各地の朝鮮式山城群といわゆる神籠石（列石）系山城は、その先後関係、軍用路としての官道成立との関係などの論点を孕みつつ、その軍事的性格は国家形成の過程、段階と対応することが考えられる。７世紀末、8世紀以後、山城の維持、運営、性格変化は、古代国家の展開に伴い、地方支配拠点の占定および対外関係（未服属地を含む）との関連性を強めて進行するであろう。

ごく最近、古代山城調査研究のリーダー、向井一雄氏は、30近い山城を白村江戦後の対外防衛施設とみるステレオタイプな山城観を批判し、単純な斉明朝築城説のような従来説

の問題点や方向性を明らかにして研究が活性化することに期待を表明している。

鞠智城についても、立地、構造、形態の特異性（地域性）と普遍性が浮彫りにされる時が待たれる。また最近注目される倭国の王宮の所在する飛鳥の周辺にめぐらされた山城、羅城、烽、運河、寺院などの宮城防衛システム構想、大津京の防御性についても、倭国（日本国）の支配層の政治、防衛思想、政策の実現と不可分の関係にある。さらにこれらの背景をなす唐、新羅の侵攻という脅威論を、２国一緒くたにでなく、それぞれの側の事情を一々あらためて捉え直してみなければならない（例えば、668年以後の新羅と倭国の交流、670年以後の新羅と高句麗遺民との連携、671年以後の高句麗遺民の来倭、676年の新羅の朝鮮半島統一など)。同時に、東アジア、東ユーラシアの視点に立って倭国社会の営みを俯瞰し、明解な全体史像を探究する必要があると思われる。

《発表③》

「古代鞠智城と東アジア」

佐藤　信　（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

はじめに　　古代鞠智城の歴史的意義　　日本古代国家の確立過程と東アジア

1．白村江の敗戦と鞠智城

1．1白村江の戦いー古代東アジアの国際戦争

唐の朝鮮半島侵攻と東アジアの動乱…存亡の危機を迎えた諸国の中央集権化への動き

白村江の戦い（六六三年）倭・百済復興勢力×唐・新羅

倭の百済救援軍派遣と斉明天皇・中大兄皇子・中臣鎌足らの北九州への移動

倭軍の実態としての国造軍ー地方豪族軍　　肥後の地方豪族の参戦

日・中・韓の国際的研究の課題

1．2白村江の敗戦後の防衛対策

古代朝鮮式山城…亡命百済貴族と築城技術　長門城。大野城・基肄城（椽城）。

○『日本書紀』天智四年（六六五）八月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

水城…版築の敷粗朶工法、柱の埋め殺し工法、暗渠導水管の精密な工法　　韓国の水城

文武二年（六九八）五月　大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治

○『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条

大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ。

2．鞠智城の歴史的背景と東アジア

2．1　有明海と東アジア

有明海と国際関係

筑紫国造磐井と高句麗・百済・新羅・加耶との外交。勢力基盤…筑紫・火・豊国

八女古墳群岩戸山古墳（福岡県八女市）と石人・石馬文化圏　　阿蘇石

火国古墳文化の展開と江田船山古墳（熊本県菊水町）出土鉄刀銘

ワカタケル大王と火（肥後）の地方豪族　　奉事・典曹人・書者張安（渡来人）

烽のネットワーク　有明海側にも烽の連絡網…鞠智城にもつながる

○『肥前国風土記』七郡に計二十か所の烽

養父郡・神埼郡・小城郡に一所、松浦郡に八所、藤津郡に一所、彼杵郡に三所、高来郡に五所、

松浦郡…「褶振峰〔郡の東に在り。烽家。名を褶振烽と曰ふ。〕」「値嘉郷〔郡の西南の海中に在り。烽家三所有り。〕」

2．2　肥君と東アジア

肥君の展開

大伴氏による火葦北国造阿利斯登の半島派遣

火葦北国造阿利斯登の子日羅と百済・新羅

筑前国嶋郡大領肥君猪手

対隼人政策と肥君

○『日本書紀』敏達十二年（五八三）七月朔条

詔して曰はく、「我が先考天皇（欽明）の世に属りて、新羅、内官家を滅せり。…先考天皇、任那を復てむことを謀りたまへり。果さずして崩りまして、其の志を成さずなりき。是を以て、朕、当に神しき謀を助け奉りて、任那を復興てむとおもふ。今百済に在る、火葦北国造阿利斯登が子達率日羅、賢しくして勇あり。故、朕、其の人と相計らむと欲ふ」とのたまふ。

○『日本書紀』敏達十二年（五八三）是歳条

日羅、…「檜前宮御寓天皇（宣化）の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使しし、火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子、臣、達率日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて来朝り」とまうす。」…是に日羅、桑市村より、難波の館に遷る。徳爾等、昼夜相計りて、殺さむとす。…遂に十二月の晦に、光失ふを候ひて殺しつ。日羅、更に蘇生りて曰はく、「此は是、我が駆使奴等せる所なり。新羅には非ず」といふ。…乃ち使を葦北に遣して、悉に日羅の眷属を召して、徳爾等を賜ひて、情の任に決罪しむ。是の時に、葦北君等、受りて弥売嶋に投つ。…日羅を以て、葦北に移し葬る。…

○大宝二年（七〇二）筑前国嶋郡川辺里戸籍

肥君猪手…嶋郡大領（郡司）、「戸主追正八位上勲十等肥君猪手」

戸口一二四（不課一〇九…女四五・奴婢三七）

○天平八年（七三六）度薩摩国正税帳

出水郡「大領外正六位下勲七等肥君」、薩摩郡「主帳外少初位上勲十二等肥君広龍」

道君首名…筑後国司で肥後国司を兼任

○『続日本紀』和銅六年（七一三）八月辛丑・丁巳条

従五位下道公首名、新羅より至る（遣新羅大使）。　従五位下道君首名を筑後守。

３．鞠智城の築城と東アジア

３．１鞠智城の発掘調査成果と百済

古代朝鮮式山城

百済系技術　　石垣・城門・門礎石・水門・版築　　構造、技術、石材

八角形建物、貯水池・貯木場…韓国河南市の二聖山城の多角形建物・貯水池

百済系小金銅仏　　仏教

倉庫群　　烽の連絡網

交通体系と鞠智城　　陸上交通－西海道・東西官道／水上交通－菊池川など

３．２鞠智城の機能

大宰府…大宰府－鞠智城司　　防人

肥後国…国司（－鞠智城司）－軍団　　軍団兵士

菊池郡…所在郡

機能－軍事・斥候・穀貯蔵・実務官衙（政所）・厨

大宰府出土木簡と基肄城の穀

○大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随　大監正六位上田中朝

おわりに　　今後の課題…学術的検討の深化と発信

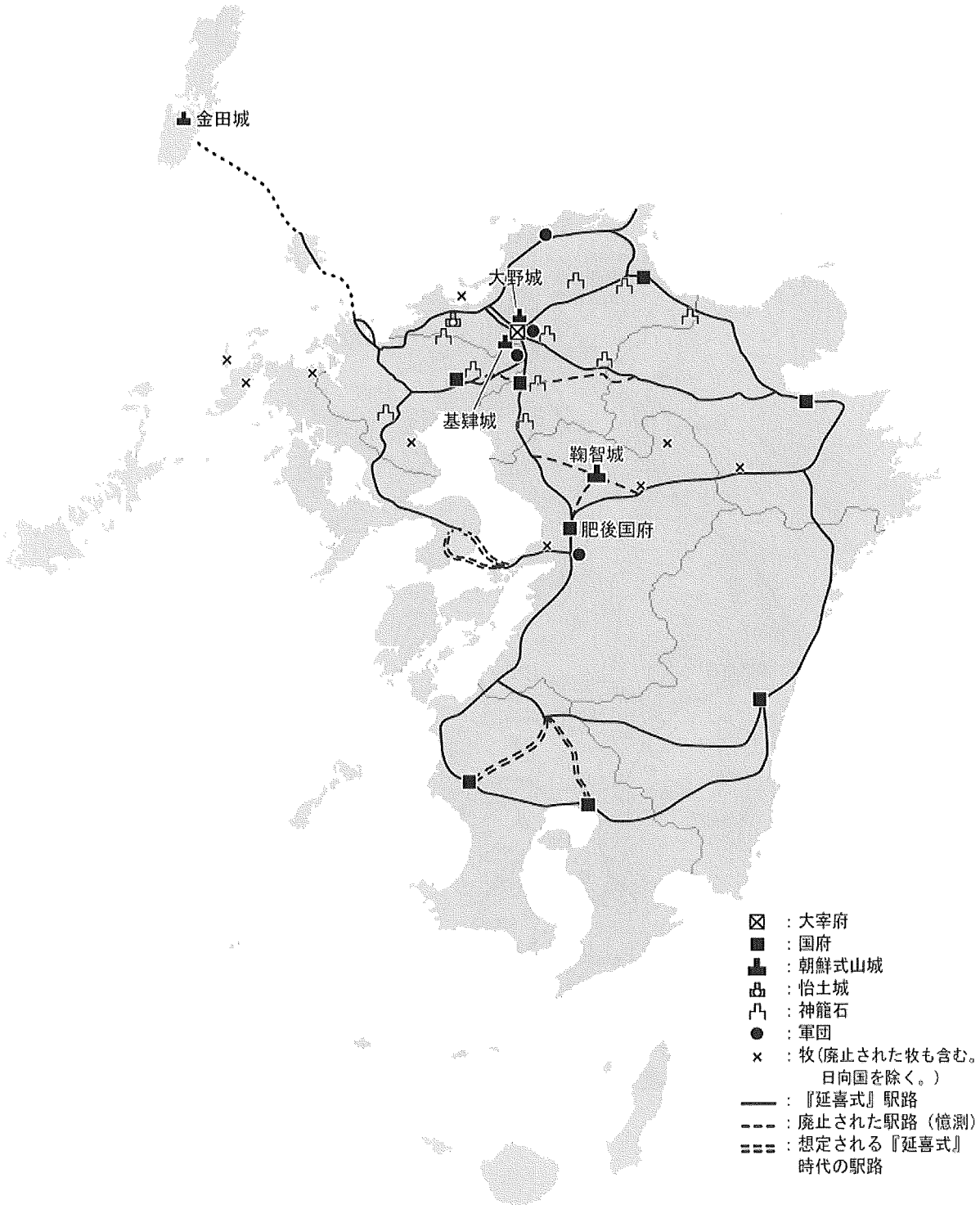
《パネルディスカッション》

～メモ～

～メモ～

参考資料１

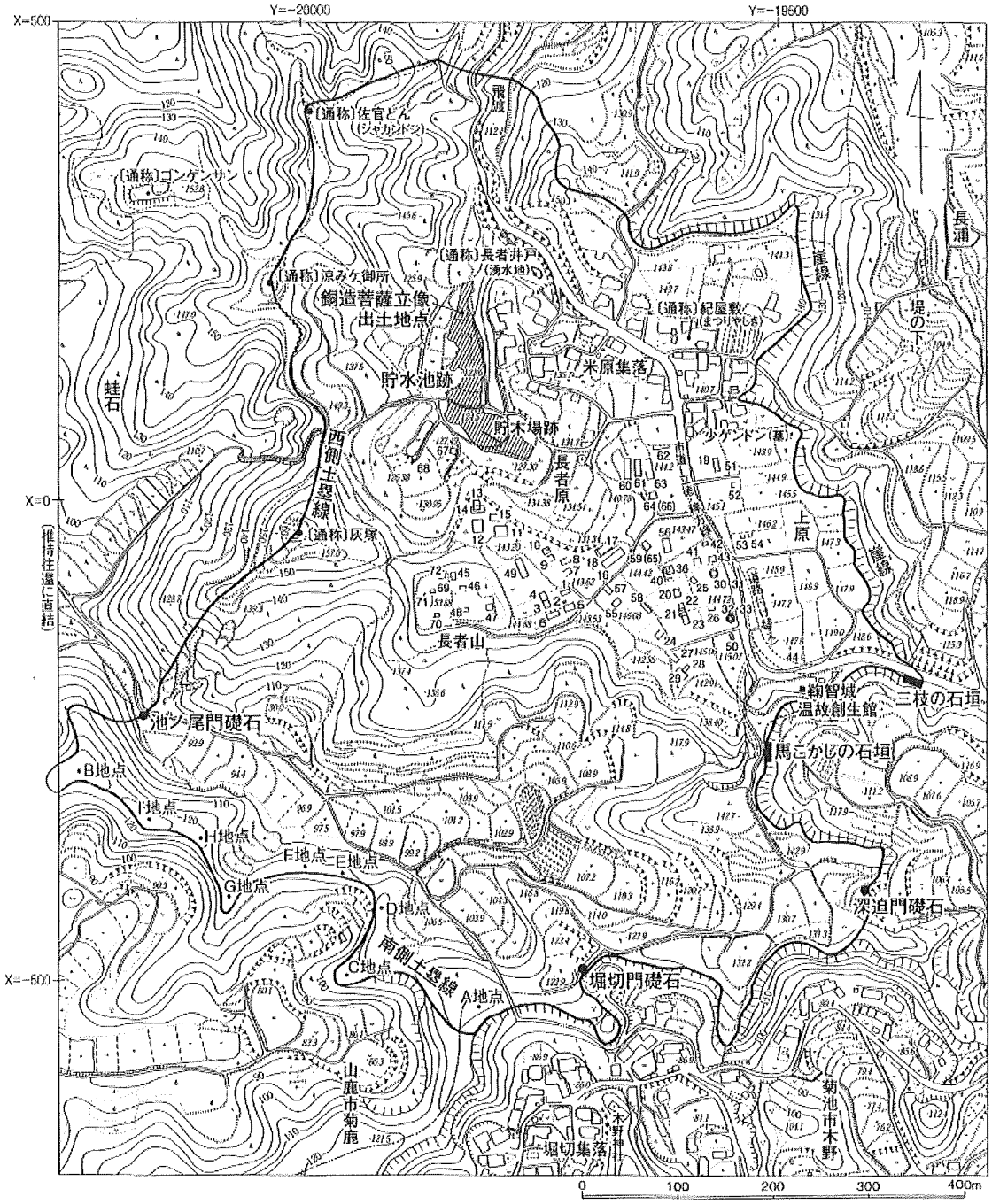
鞠智城関連マップ



※　日野尚志『古代の官道』（鞠智城・温故創生館・館長講座資料）2007を基に作成。

参考資料２

鞠智城平面図



鞠智城関連年表

西暦（年号）	内　　容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化２）年	改新の詔を発布。
661（斉明７）年	朝倉橘広庭宮に遷宮。
663（天智２）年	白村江の戦い　※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智３）年	対馬・壱岐・筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智４）年	近筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667（天智６）年	近江大津宮に遷宮。 大和に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城を築く。
672（天武元）年	壬申の乱。
678（天武７）年	筑紫国大地震。
696（持統 10）年	※「肥後国」の文献上の初見。
698（文武２）年	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治させる。 高安城を修理する。
699（文武３）年	高安城を修理する。 大宰府に稲積・三野の二城を修理させる。
701（大宝元）年	大宝律令制定。
710（和銅３）年	平城京に遷都。
719（養老３）年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756（天平勝宝 8）年	怡土城を築く。
794（延暦 13）年	平安京に遷都
799（延暦 18）年	大宰府管内を除いて烽を廃止。
858（天安２）年	（閏２月）肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 （５月）菊池城の不動倉１１棟が火災に遭う。
875（貞観 17）年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草を噛み抜く。
879（元慶３）年	肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

この電子書籍は、古代山城鞠智城を考える 鞠智城シンポジウム発表要旨 2010 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城鞠智城を考える 東アジアの中の古代鞠智城
鞠智城シンポジウム発表要旨 2010
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日